

国  
語

23 中-国(1)

【注 意】

- 【一】 開始の合図があるまで開けないこと。
- 【二】 問題は1ページから27ページまでに印刷してあります。開けたらすぐにページを確かめること。
- 【三】 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 【四】 字数制限のある問題は、句読点も一字分として数えます。
- 【五】 試験終了後は、まず解答用紙を回収し、そのあと問題用紙も回収しますが、問題用紙には名前を書く必要はありません。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合により、本文の一部を改変しています)

インターネットの時代になり、何かわからないことや知りたいことがあればインターネットで検索すればよいという感じになり、自分の頭でじっくり考えることを省略する風潮が顕著になってきた。

そのようなことを授業中に話すと、

1 「ネットで検索するのと考えるのと、何が違うんですか？」

と言う学生もいる。たしかに自分で考えようといっても、頭の中に浮かぶ言葉をめぐってあれこれ考えるわけで、自分の記憶を検索している面があるのは否定できない。だが、読書も含めて自分自身の経験に根ざし、年月をかけて熟成した思いや考えをこねくり回すのは、自分自身から切り離されてネット上にある情報を検索し引き出すのとはまったく様相が異なる。

学生たちのレポートをみても、インターネットが普及してからは、ネット上で検索して出てきたものを切り貼りしたものが目立つようになった。なかには、途中まで「である」調だったのがいきなり「ですます」調に変わったり、明らかに筆者が専門家であるのがわかる文章がそのまま地の文になっていたりして、切り貼りであることがあからさまにわかるものまであり、自分の考えを書いているかのように小細工をすることさえ考えつかないのだなあと呆れることもある。

それほどまでに他人の考えた文章を切り貼りするのがごくふつうのことになっているということかもしれない。それが悪いことだという意識が強い。それは、盗作という意味で問題だけでなく、自分の頭でじっくり考えることを放棄してしまっているという意味でも問題である。

2 思考を深めるには、まず文章にしてみるとよいと言われる。それは一理ある。私は、心理学者としてカウンセリングもしてきたが、カウンセリングが効果をもつのも、じっくり耳を傾けてくれる聴き手を前に、思い浮かぶことを語っていくうちに気づきが得られ、これまでと違った構図のもとに自分の経験や思いを検討できるようになるからである。

それと同様に、日記を綴るように自分の思うことを書いていくことで気づきが得られる。自分の内面に渦巻くモヤモヤした思いを文章にすることで、心の中が整理されていく。言葉にすることとは、言葉を用いてモヤモヤした頭の中を整理することに等しい。

1 私たちは、自分の心の中で経験していることをそのまま取り出して理解することはできない。(1)

何だかわからないけれども、心の中がざわついて落ち着かない。なぜかイライラしてしょうがない。何だろう、この物足りなさ。何だろう、この焦っている感じは。そんなふうに、言葉にならない衝動的なもの、感情的なものが、自分の中に渦巻いているのを感じることもある。

3 そのようなモヤモヤした心の内をだれかに伝えるには、それを言葉ですくい取らなければならない。言葉にしない限り、そうした経験について人に語ることはできない。自分の思いを書いたり語ったりすることが大事だというのは、それが自分の過去の経験や現在進行中の経験を整理することにつながるからだ。(2)

4 自分の内面で起こっていることを書いたり語ったりすることは、まだ意味をもたない解釈以前の経験に対して、書いた語ったりすることのできる意味を与えていくことだと言ってよい。それによって経験が整理されていく。

5 その際、語彙が乏しいと、内面をうまく言語化することができず、なかなか頭の中が整理できない。つまり、思考が深まらない。内面のモヤモヤを言語化して思考を深めるには、語彙の豊かさが求められる。そうすると、本を読まない者が増えているという最近の風潮は、危機的と言ってよいだろう。

6 思考を深めるのに読書が役立つというのは、語彙が豊かになるという意味だけではない。自分自身を見つめる機会になるという意味もある。(3)

7 本を読むことを情報収集と位置づけている人は、自分のしていることに今すぐ直接役立つ情報のみを求めて実用書ばかりを読む傾向がある。実学志向が強まっている今どきの学生にもそうした傾向がみられる。だが、それでは思考は深まってい

かない。(4)

本を読むことの意味は、けっして情報収集のためというだけではない。本を読んでいると、自分の記憶の中に眠っているさまざまな素材が活性化され、ふだん意識していなかった記憶の断片が浮かび上がり、それをきっかけにいろいろなことが連想によって引き出されてくる。「そういうえば、あんなことがあった」「こういう思いになったことがある気がする」「同じようなことを考えたことがあったなあ」「あれはいつのことだったかなあ」「自分も似たような状況に陥ったことがあったな」などといった思いが頭の中を駆けめぐる。

このように、本を読むことは、自分を見つめ直すきっかけになる。本を読むことで、日頃忘れていた自分と出会うことができる。書かれている文章に刺激されて、長らく意識にのぼることがなかったいろんな時期の自分に触れることができる。本を読まずにいと、そうした自分に触れる機会をもつことがないまま日常が過ぎていき、自分を見失うことになってしまふ。

本を読むことには、自分自身に出会うという効用のみならず、異質な知識やものの見方・考え方に会うという効用もある。

ネットの世界では、何かを検索すると、関連する情報が自動的に選別されて出てくるし、使用者の履歴をもとに関心もちそうな情報が選り出されて表示される。また、興味のある見出ししかクリックしないため、出会う情報が非常に偏ったものになってしまう。自分の考えに対する反証になるような情報にはあえて目を向けようとしない。興味のない情報や意見にはわざわざ目を向けることがない。

そのため、異質なものの見方・考え方に触れる機会がなく、自分のものの見方・考え方に凝り固まってしまいがちだ。ネット上で喧嘩のような誹謗中傷が目立つのも、自分と違うものの見方・考え方を理解できないし、理解しようという心構えもないからだろう。いわゆる X からの脱却ができていない。

心の世界を広げ、異質な他者に対する寛容な態度を身につけるといいう意味でも、読書によっていろんなものの見方・考え方に触れるのは大切なことである。

さらには、いろんな視点を自分の中に取り込むことで、物事を多角的にみることができ、深くじっくりと考えることができるようになる。

そうした読書の効用を活かすには、関心の幅を狭めずに、あえていろんな領域の本を読むように心がけるのがよい。その意味でも、家庭や学校では、さまざまな領域の本を揃える工夫が必要である。

(二〇二二年 榎本 博明『読書をする子は〇〇がすごい』日本経済新聞出版)

〔注〕 \* 顕著：際立って目につくさま。

\* 語彙：ある言語、ある人、ある作品など、それぞれで使われる言葉の集まり。

\* 実用書：日常生活で役立つための知識や情報を主に記した本。

\* クリック：コンピュータのマウスのボタンを押すこと。コンピュータの画面上の項目を選択することができる。

\* 反証：ある主張や推論が正しくないことを証拠によって示すこと。

問 一 本文には次の一文が抜けています。どこに入れたらよいですか。この文の入る箇所として最も適当なものを、文中の(1)~(4)の中から一つ選び、番号で答えなさい。

経験そのものが言語構造をもっているわけではないからだ。

問 二 本文には論理的に意味の通らないところがあります。その箇所を文中の傍線部3より前の部分から一語で抜き出し、正しく直しなさい。

問 三 傍線部1「ネットで検索するのと考えるのと、何が違うんですか？」とありますが、筆者が考える「ネットで検索する」とことと「考える」ことの共通点と異なる点を、それぞれ説明しなさい。

問 四 傍線部2「思考を深めるには、まず文章にしてみるとよい」とありますが、それはどうしてですか。その理由を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア はっきりしない自分の思考が、誰かに向けて語られることによつて形をもつものになり、自己の言動を振り返ることがよい人間関係を作ることにつながるから。

イ モヤモヤした心の中を文章にすることで、過去の経験に対する思いを整理することができ、いやな記憶を消し去り、明日への活力とすることができるから。

ウ 思いを言葉にすることは、自分の心の中で経験していることをありのままに取り出して理解するようなものであり、過去の経験を追体験できるから。

エ 自分の心の中にあるうまく形にならないような思いが、言語化することによつてまとまりを持ち、客観的に見ることができるようになるから。

問 五 傍線部3「それ」・傍線部4「それ」の指す内容を、文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

問 六 傍線部5「危機的と言つてよいだろう」とありますが、どういうことですか。このことを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア はっきりしない心の内をだれかに伝えて経験を整理していくには、言葉にすることが必要であり、そのためにはある程度の語彙を持つことが求められる。言葉の数を増やすには読書が有効であるので、その読書をしない人が増えている昨今の状況は大変よくないと言えるということ。

イ 自分でもよくわからない心のざわめきやイライラをしずめるには、他者の気持ちを理解し、心を寄せることが重要である。人の気持ちは読書を通してしか理解することができないので、読書の習慣がなくなると衝動的な人が増え、とても危険であると言えるということ。

ウ 自分の内面で起こっていることを書いたり語ったりすることが、自分自身を見つめることにつながり、そのためには語彙が豊富でなければならぬ。しかし最近では語彙を身につける唯一の手段である読書をないがしろにする人が増えている、このままでは自分を見失う人が増えるに違いないということ。

エ なんでもネット上で検索すれば手に入るといふ風潮の中で、言語化することがますます重要になっている。そのような時代であるのに、本を読まない者が増えているということは、じっくり考える人が少なくなっているということであり、世の中の落ち着きが失われていく可能性があるということ。

問七 傍線部6「本を読むことは、自分を見つめ直すきっかけになる」とありますが、どういうことですか。このことを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読書をする中で、忘れていた自分の感情が今まさに生まれたもののようにわきあがり、過去の自分を恥じる気持ちが起こって、そのことがよりよい成長につながるということ。

イ 自分の中に眠っているものが文章を読むことで活性化され、ふだんは忘れてしまっていることがらがよみがえり、それをきっかけにいろいろな「自分」が思い出されてくるということ。

ウ 文章を読むという事で異質な知識やものの見方に出会うことができ、そのような新たな視点を持つことが、結果として本当の自分を見つけることになるということ。

エ 読書をする事によって、自分のものとは違う人生に触れることができ、自分一人では偏ってしまう考え方を修正することができるということ。

問八 文中の「X」に入る言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者依存性 いぜん イ 身体閉鎖性 へいさ ウ 自己中心性 エ 相互攻撃性 そうこうげき

問九 筆者の主張と合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネットの意見を引用するときは、人の意見だということがわからないようにするのがマナーである。

イ 人の思考を深めるのは、幅広く読書することと、今すぐ役立つ情報を敏感に収集することである。

ウ 読書は、自分とは考え方の違う人の意見を受け入れるような姿勢につながることもある。

エ 読書によっていろいろな視点を取りこむことができなければ、現代を生きることができない。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合により、本文の一部を改変しています)

吉瀬走の両親は走が高校二年生の時に相次いで家出をし、ゆくえがわからなくなってしまった。父の事業の失敗が原因である。一人残された走は通っていた高校を退学せざるをえなくなり、今後の生活に困ってしまう。そんな走に声をかけたのは高校の陸上部の先輩で、現在は人力車(俵)の引き手(車夫)をやっている前平だった。前平から誘われ、車夫になった走は少しずつ心の落ち着きを取りもどしていった。一年が過ぎた頃に先輩車夫の山上が走の母らしい女性を人力車に乗せたと報告してきた。

まだ飲んでいる前平さんと山上さんに「お先です」と声をかけて、ひと足先に店を出た。  
日暮荘に帰り、台所で水を一杯飲んでから部屋に入った。窓を開けるとひんやりとした風と一緒に風鈴の音が聞こえた。つい最近まで心地よく響いていた音が、いまはやけに寒々しい。  
いい加減外したほうがいいな……と思しながら、畳の上にごろんと横になった。

1 右手の甲を目の上にのせる。

1 自分はどうしたいのだろう。

母に会いたいのだろうか？

素直に会いたい、とはいえない。それなら会いたくないのかといえば、それもまた違う。

母さんはオレを捨てた。だけど、いまならなんとなくわかることもある。母は逃げたのだ。現実から逃げた。お嬢様育ちで、苦労知らずで生きてきた母には、現実が過酷すぎたのだと思う。

十七歳。あときのオレは、母にとって頼れる息子でもなく、守らなければならないほど幼くもなかった。役にもたたな

い代わりに、手もかけずにすむ。そんな存在だったのだ。

恨んではいない。

憎んでもいない。

なにかを期待してもいない。

生きて、元気でいて欲しいと思う。

だけど、幸せでいて欲しいとは思えない。

いいわけでも、うそでもよかった。アパートを出て行くときに、ひと言なにか言ってくれていたら、と思う。そうしたら、ちゃんと恨んで、ちゃんと憎んで、ちゃんと諦めることができた。

そのほうが、ずっとラクだったはずだ。

母が連絡をしてくるのではないか？ 父がオレたちを捜してくれるのではないか？ としばらくの間、スマホを手放せなかった。アパートの隣の部屋に住んでいる大家に、引越し先である日暮荘の住所を預けて、冬のあいだ中、いつもどこかで待っていた。待っているから、連絡をしてこないことが不安だった。事故にあったのではないか、まさか自殺など考えているのではないか、連絡したくてもできない事情があるのではないか……。

2 不安と苛立ちと、現実逃避の繰り返しで、苦しかった。

それでも立っていられたのは、仕事があつたからだ。住む場所もあつた。前平さんも力さんも、琳子さんも山上さんもヒデさんも、力車屋のみながいた。居場所があつた。

なにかが少し変わったのは、車夫の見習い期間が終わり、客を乗せて街をまわるようになった頃だ。

ひとりでも生きていける。

親を頼らなくても、ひとりで生きていける。生きていくのだと自然と思うようになった。

母や父から連絡を待ち続けている自分が、白馬に乗った王子様を待つメルヘン女と同じに思えて笑えた。もう待たない。そう決めた。決めたはずだ。

なのに、なんなんだよ……。

3 玄関のほう騒がしくなり、鍵を開ける音がした。よどんだ空気が一瞬にして動きだした。からだを右に倒してふすまに背を向け、目を固く閉じる。

「先に、風呂入るぞ」

山上さんの声にういっすと前平さんが応えて、次の瞬間、オレの部屋のふすまが勢いよく開いた。

「親だつてノックくらいするだろ……」と思うけれど、この人に言ってもたぶんムダだ。

廊下のあたりが部屋の真ん中まで差しこむ。目を閉じていても、その明るさを感じる。

「なんだよ、布団も敷かないで」

前平さんの声に、向こうから「寝かせとけよ」という山上さんの声が重なる。

「風邪ひくぞ」

そう言つて前平さんは窓を閉め、タンスの横にたたんである掛け布団をオレの頭からばさつと掛けて出ていった。

あたたかい。

あたたかくてほつとして、なぜか無性に泣きたくなつた。

泣いてしまえばラクになるのだろうな、と思う。わけのわからない胸の奥の塊を吐きだして、だれかにすがれば、きっと助けてくれる。前平さんも、力さんも、みんな、それでいいんだといつて受けとめてくれると思う。答えは出なくなつて、

一緒に迷つてくれると思う。

ここへ来てまだ一年しかたつていないけれど、それはわかる。そういう人たちだ。

4 布団の端をぎゅつと握る。

だから、泣かない。泣いてはいけない。いま泣いたら、もたれたら、また次も頼つてしまう。だれかを頼ることがあたり前になつて、もたれずにはいられなくなる。ひとり立っていられなくなる。

自分を甘やかすことを許したら、その瞬間から踏ん張れなくなる。

走ることと同じだ。

強くなるために必要なのは、自分への甘えを絶つことだ。

例外を作らず、言い訳をせず、自分を疑わず、半歩前を向いていまを繰り返す。

……それができたら、そんな自分になれたら最強だよなと思う。だけどオレはやっぱり、仕方がないじゃないかと言いつつを考へてしまう。自分を信じ切れることもできず、ぐだぐだといらぬことを考へてしまう。

ここに来て、仕事をはじめて、少しは変わったと思つていたのに……。

ちつとも変わっていない。

オレはなにから目をそらしているんだろう。なにから逃げようとしているんだろう。なにが、怖いんだ。

布団に強く顔を押しつけた。

翌朝早くに目が覚めた。

窓の外は暗い。窓を開けるとまだ夜中のような闇に包まれているけれど、頬にあたるのは朝の風だ。大きく息を吸いこむ。

——走りたい。

【 中 略 】

ふいにふくれあがつてきた思いに戸惑った。なぜいま、そんなことを思ったのだろう。仕事をはじめてから、こんなふうに思ったのははじめてだ。

走ることが好きで、どんな形であれ、走ることが仕事にしているいまの自分を幸せだとも思う。だけど、いまわきあがつてきた思いは、それとは違う。別のものだ。

走りたい。

理由も意味もなにも求めず、なにからもとらわれず、思いきり自由に。

街灯の明かりが灯る街の中を駆け出した。ピッチを上げる。風の音がわずかに変わる。アスファルトを足の裏でとらえ、それを押し出す。地面から両足が離れる一瞬、ぐいとしなやかにからだは伸びる。風景が視線の端で流れていく。前へ前へと自然と足が動く。自分の刻む足音が、心地よく耳に届く。

気持ちがいい。

ああ、そうか、走りたいと思うことに、理由なんていらぬのか。

隅田川沿いの遊歩道に出たところでもう一段階スピードをあげる。肌が栗立つ。ぼうぼうと風の音が強くなる。心臓の鼓動がからだに響く。

走ることが好きだ。だから走る。それだけだ。

うつすらと朝もやに包まれた街が色づき、川面がきらきらと反射しはじめる。

足を緩めて、空を見あげた。

夜の色を洗い流したように白く淡い空が広がっていた。

スズメがさえずり、向こうの通りを走る車の音が大きくなった。

足をとめて、息を整えた。

川の上を砂利を乗せた大きな船がエンジン音を響かせてなめるように進んでいく。

ぽーお

汽笛がひとつ鳴った。

会いたい。

母さんに会いたい。オレは、会いたいんだ。

一年前に戻ることはできない。許すことも簡単にできるとは思えない。オレは母さんに腹を立てている。怒っている。だけど、会いたい。

日暮荘に戻ると、前平さんと山上さんが居間から飛び出してきた。

「ただいま」と言うと、前平さんに頭を叩かれた。

「すみません」

あやまることなんて、本当はない。いつ、なにをしようとオレの勝手だ。

この人たちは、勝手に腹を立て、余計な世話を焼いて、赤の他人のオレのことを心配して……。こうして待っていてくれる。

そういう人たちが、ここにいる。

「さつさとあがつて、風呂入れ」

山上さんは冷蔵庫から「山上」とマジックで書いてある牛乳を取り出しながらオレに言い、ん？と首をかしげた。

②

前平さんがブルブルとかぶりを振る。

「飲んでないっすよ」

牛乳パックを持ちあげて目を細める。

「グラス一杯分。一五〇ccってところだな」

山上さんがそう言うって視線を向けると前平さんは顔をそらして「マジか……」とつぶやいた。

③

④

どーい問題なんすか、なつ、とオレに向かってちろつと舌を出した。

「あの」

ふたりの視線が同時にオレに向いた。

「なんだ、吉瀬も飲んだって言うんじゃないだろうな」

「へっ？ あ、飲まないです。乳製品そんなに好きじゃないし」

あわてて首を振ると、山上さんはどこか不満そうに鼻を鳴らし、手にしている牛乳をグラスに注いでオレにずんと差し出

した。

⑤

「あ、でもこれは」

前平さんをちらと見ると、飲んどけ飲んどけ、めんどくせえからと顔に書いてあった。山上さんが、アゴをくんとあげる。

なんで牛乳……、ため息と一緒に牛乳を喉のどに流しこんだ。ごくごくごく、と一気に飲み干ほして思わず「うまっ」と言っつと、山上さんは満足そうにうなずいた。

「あたりまえだ」

「これも取り寄せてんすか？」

「岩手の湯山牛乳だ」

「好きっすね、取り寄せ」

そう言うって笑う前平さんを見て、「だから勝手に飲むなと言ってるんだ」と山上さんは顔をしかめながら、ぼそりと言った。

「そーいや、おまえ、なんか言いかけてなかったか？」

ん？ ああそーだ。あまりにもどうでもいい会話に巻きこまれて、肝心かんじんなことを言いそびれるところだった。

唇くちびるをなめて顔をあげた。

「山上さん、写真\*、見てもらわなくていいです」

「おまえの気持ちも、わかんないでもないけどな、無駄むだな我慢がまんをしてもいいことないぞ」

「違います。そうじゃなくて、オレ。我慢とかそんなじゃなくて」

背筋を伸ばす。気持ち、アゴがあがる。

「会いたいです。母に、会いたいです」  
山上さんが小さくうなづく。

「でも、昨日のお客さんが母だったか、そうでなかったかはどうでもいいんです。母は結局、オレのところへは来ていない。だからオレからは捜しませぬ」

「それが無駄な」

「我慢じゃないです」

前平さんのことばを断った。

<sup>6</sup>「我慢じゃないです。オレの意地です」

人から見たらどうでもいいバカみたいなことかもしれない。だけど、意地を張っていたい。

去年のオレにはできなかったけれど、いまはできる。意地を張ることができる。

いまのオレには、いつてきますと言える人がいる。

ただいまと帰っていく場所がある。

オレには、オレの居場所ができたから。

「意地なんです。オレの」

山上さんはポンとオレの肩を叩いて部屋に戻り、前平さんは「アホだな、おまえ」と笑った。

(二〇一九年 イトウ みく『車夫』文藝春秋)

〔注〕\*店：走・前平・山上の三人が食事に入った焼き鳥屋のこと。

\*日暮荘：走が暮らしている車夫たちの寮のこと。

\*力さん：走たちが所属する人力車の会社である「力車屋」の親方。後にある「琳子さん」はおかみさん、「ヒデさん」は先輩車夫のこと。

\*メルヘン女：ここでは、現実を見ずにおとぎ話のような理想を追い求める女性という意味。

\*写真：焼き鳥屋で、山上に走の母の写真を見せて確認してもらった話が出ていた。

問 一 ① ⑤ に入る会話文として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 前平、おまえこれ飲んだらろ

イ カルシウムはちゃんととれ

ウ そういう問題じゃない

エ どこ行つてたんだ

オ いいじゃないっすか、今度オレの飲んでいいっすから



問 六 傍線部5 「いまわきあがってきた思いは、それとは違う。別のものだ」とありますが、どういうことですか。この

ことを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高校の陸上部で走っていたときと車夫として走っているときとは走ることに対する考え方が異なっており、車夫として走るとはあくまでも仕事であるということ。

イ 仕事で走ることといま走りたいという思いは同じものではなく、いま走りたいという気持ちはただ走るのが好きだという純粹じゆんすいな思いから生じたものであるということ。

ウ 走ることを仕事にしている幸せといま走りたいという気持ちは別であり、いま走りたいという気持ちは自分を甘やかすことへの恐れおそから逃れるためのものであるということ。

エ 車夫として走ることと単に走りたいという感情は違っており、いま走りたいという感情は突然とつぜんわきあがるものなので、自分自身でも戸惑いを感じてしまうということ。

問 七 傍線部6 「我慢じゃないです。オレの意地です」とありますが、このときの走について説明したものとして最も適

当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 走ることと同じように理由や意味を持たなくても母に会いたいのが、自分から母を捜すとなると話は別であり、やはり自分を捨てた母のことはどうしても許せないと感じている。

イ 山上が牛乳などの取り寄せ商品にこだわりを持つように、自分も母が自分のことを置いてしまったことにこだわりが残っており、納得なっとくできるまでは会いたくないと思っっている。

ウ 以前の自分は不安だらけで生きていくのに手一杯いっぱいだったが、いまの自分は生活にも心にも余裕よゆうもできており、母に対する自分の気持ちも冷静に見つめられるようになっていいる。

エ 母に会いたい気持ちがないわけではないが、苦しかった当時の自分を救ってくれたのは力車屋のみんななので、いまさら母に頼る気持ちはまったくないと考えている。

問 八 この文章の特徴として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 前半は走の考えをゆったりとした時間の流れとともに表現しているが、後半で仲間たちとのリズム感のある会話を描くことで、走の気持ちが大きく変化する過程を描いた物語である。

イ 主人公の周囲の人物に好人物を配し、子どもを残していなくなってしまう両親との違いを明確にすることで、走が周囲の人々に支えられながら自らを取りもどしていく様子を描いた物語である。

ウ 前半はあえて会話文を少なくする一方、後半にリズム感のある会話文を集中させることによって、後半になって走が心身共に大きく成長していく様子をスピード感あふれる表現で描いた物語である。

エ 思い悩む走の姿を描いた前半と、走る中で自分の気持ちの整理をしながら前を向こうとしている走の様子を描いた後半とを、走の思いや考えの描写を通して対照的に描いた物語である。

三 次の各問いに答えなさい。

問 一 次の文の傍線部は言葉の使い方がまちがっています。傍線部全体を正しい形に直しなさい。

日々の練習の成果で、全国トップクラスのチームと肩を比べるほどに成長した。

問 二 次の説明に当てはまる人物の名前を、後のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ギリシヤ生まれの記者・日本研究家で、本名をラフカディオ・ハーンという。日本各地に伝わる伝説や、「耳なし芳一」などの幽霊の話を集めた『怪談』を著し、日本文化の海外への普及に大きな影響を与えた。

ア 夏目漱石    イ 小泉八雲    ウ 福沢諭吉    エ 森鷗外

問 三 次の文で——部が直接かかっている部分を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

携帯電話を、電車で熱心に見ている人は、少ない。



**五**

次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- 1 地球の周りをエイセイが回る。
- 2 町のフクゴウ施設で買い物をする。
- 3 所長のセキムを全うする。
- 4 潜水艦で海底をタンサする。
- 5 昨日は手をコッセツして大変だった。

**六**

次の傍線部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

- 1 金の鋳脈を掘り当てる。
- 2 当時は主君に忠誠をつくすものだった。
- 3 友人の結婚を祝う電報を打つ。
- 4 彼は独学で英語を覚えたらしい。
- 5 この辺りは降雪量が多い地域だ。

問題はこのページでおしまいです。

